

## 奄美・沖縄方言における力行子音体系の変遷

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 内間 早俊   |
| 雑誌名 | 言語科学論集  |
| 巻   | 14  |
| ページ | 79-92   |
| 発行年 | 2010-12-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10097/50682">http://hdl.handle.net/10097/50682</a> |

# 奄美・沖縄方言におけるカ行子音体系の変遷

内 間 早 俊

キーワード: 琉球方言、カ行子音、狭母音化、喉頭化、口蓋化

## 要 旨

奄美・沖縄方言におけるカ行子音の共時態からその変遷過程を構築しつつ、問題点を指摘した。カ行子音に見られる音韻変化は、喉頭化、口蓋化、摩擦化である。これらの変化について、従来は狭母音化にかかわる音韻体系上の要因から説明されてきたが、本稿では狭母音化とそれにもなう強い呼気の発生という音声学的な要因が深く影響することを指摘した。

## 1. はじめに

琉球方言の音韻については、金城・服部(1955)「附、琉球語」内の論文を挟んでその前後で記述の方法に差が現れる。それ以前のチェンバレン、伊波普猷、宮良當杜などは音韻の体系的記述よりもむしろ、一々の音韻事項について記述し、本土方言との比較という形をとるのに対し、1960年代以降は音韻論の整理がなされた音韻研究が確立することで、共時態の比較を通してその通時的側面までいっそう明らかにすることが可能になったと言える。一方で、それぞれの体系がどのような通時的位置づけをなし、そこに想定される個々の変遷過程やその要因がどうなっているかという点についてはなお検討する余地があると考ええる。

本稿では、琉球方言の特にカ行子音を取り上げ、先行研究で積み上げられた共時的な体系記述をもとに体系間の比較をおこないながらその通時の変遷を構築し、さらに各体系間に見られる音韻変化とその要因について新たな角度からの指摘をこころみる。

## 2. 先行研究と問題点

琉球方言のカ行子音に関しては中本(1976)の優れた研究がある。中本は琉球方言全域のカ行子音体系を15種に類型化し、それぞれの代表的な方言を取り上げて具体例についても示している。中本は類型化した体系を音韻論的な表記によって示して

いるが、これは琉球方言カ行子音体系の実態を全体的な傾向として把握するには都合よいが、それぞれの体系の具体的変遷を考えるには不都合な点もあるため、本稿では中本の表をもとにしながら各体系の具体例を参考にし、音声表記にあらためて表1に示す。

表1. 琉球方言のカ行子音の分類(中本1976、p123 II-6表を改編)

| 種類<br>段 | A (奄美・沖縄)        |                 |   |                |                 |                |                 |   | B (先島) |    |    |    |    |      |    |
|---------|------------------|-----------------|---|----------------|-----------------|----------------|-----------------|---|--------|----|----|----|----|------|----|
|         | 1                | 2               | 3 | 4              | 5               | 6              | 7               | 8 | 9      | 10 | 11 | 12 | 13 | 14   | 15 |
| ア       | k                | k               | k | h              | h               | h              | h               | h | k      | k  | k  | k  | h  | h    | k  |
| イ       | k <sup>(2)</sup> | tʃ <sup>2</sup> | f | k <sup>2</sup> | tʃ <sup>2</sup> | k <sup>2</sup> | tʃ <sup>2</sup> | k | k      | ts | k  | s  | k  | s    | △  |
| ウ       | k <sup>(2)</sup> | k               | k | k <sup>2</sup> | k <sup>2</sup>  | k <sup>2</sup> | k <sup>2</sup>  | k | f      | f  | Φ  | Φ  | Φ  | Φ(f) | △  |
| エ       | k                | k               | k | k              | k               | ç              | ç               | f | k      | k  | k  | k  | k  | k    | k  |
| オ       | k                | k               | k | Φ              | Φ               | Φ              | Φ               | Φ | k      | k  | k  | k  | k  | k    | k  |

以上の15種はカ行ウ段音の在り方によって大きくAとBに二分されており、それぞれ奄美・沖縄方言と先島方言に対応する。さらにA、Bはそれぞれ類似する体系ごとにA-1～A-8、B-9～B-15と下位分類される。表の表記について補足すると、例えばA-1に示されているカキクケコの各子音がk, k<sup>(2)</sup>, k, kとなる体系は、そこに属する方言にk, k, k, k, kまたはk, k<sup>2</sup>, k<sup>2</sup>, k, kという体系を持つ方言が含まれることを表し、同様にB-14はウ段がΦもしくはfのいずれかの子音を持つ体系を含んでいることを示している。また、B-15で示される△は脱落融合もしくは促音化、撥音化することを示している。中本はこのように琉球方言の共時態を分布として示した上で、地域によって多様なバリエーションを生み出すカ行子音の音声的变化経緯について次のような図示をしている。

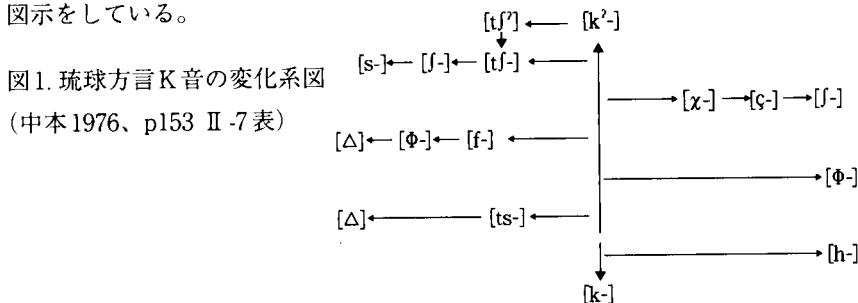


図1を見ると、カ行子音の変化はタテ・ヨコの二軸で成立していることがわかる。タテの変化は、原形から $k > k^?$ という変化方向があり、調音点を変えずに音声特徴を添加するという変化である。ヨコの変化は左むきと右むきの変化によって音環境の違いを表しており、左むきの変化がイ、ウ段での変化、右むきはア、エ、オ段での変化である。ヨコの変化でイ・ウ段—ア・エ・オ段という変化の対立が生まれる要因を中本は母音構造の変化に求めており、その内容は次のようにまとめられる。

琉球方言の母音構造は $e > i$ 、 $o > u$ のように、もともと半広母音のエ、オがそれぞれ狭母音のイ、ウに近づくように狭母音化することが大きな特徴である。それによって、母音[i]と[e]、[u]と[o]で区別していた音韻的機能を失うまいとして、もともとのイ、ウ段に「緊張」が生じ、この「緊張」が母音の果たしていた音韻的機能を子音の変質によって代荷するようにはたらいことがカ行子音の変化要因となった。すなわち、狭母音化で音韻的機能が失われようとするのをイ・ウ段の子音を変化させることで免れようとしたためにそれぞれの子音が同じ変化方向を辿ったのである。

具体的には、狭母音化という母音変化のうち、先にオ段の $o > u$ が生じそれに伴ってウ段に「緊張」が生じた結果、奄美・沖縄方言ではウ段子音で $k > k^?$ と無気喉頭化音の $[k^?]$ を生みだし、先島方言では $k > f$ という変化で唇歯摩擦音 $[f]$ を生み出した。続いて、エ段も $e > i$ と狭母音化を始めることでイ段に「緊張」が生じ、その「緊張」がイ段子音を変化させるようにはたらき、奄美・沖縄方言では先行するウ段子音と同様、無気喉頭化音の $[k^?]$ を成立させたと考える。一方、先島方言では $e > i$ の狭母音化に伴ってイ段母音の $i$ が $i > i$ のように舌尖に強い摩擦を伴う中舌母音 $[i]$ へと推移して、もともとのイ段—エ段という音韻的区別をイ段母音の変質によって保ったのである。

中本に従えば、いずれもエ・オ段の狭母音化に伴って、イ・ウ段音に生じる「緊張」がそれぞれの子音を変質させたり、場合によっては母音の姿を変えたりするようにはたらいものと解されるわけだが、ではア・エ・オ段の子音はどのような要因で変化したと考えられるだろうか。中本はア・エ・オ段について「弛緩」という用語を用いて次のように述べている。

子音の変質をせまる同一の力が、イ・ウ段では「緊張」、ア・エ・オ段では「弛緩」という両方向の力となって変化をおこしたにすぎない。「緊張」による変化が無気・喉頭化音の $[k]^{i1}$ または唇歯摩擦音の $[f]$ への変化であるのに対して、「弛緩」による変化は摩擦音の $[h]$   $[ç]$   $[F]^{i2}$   $[ç]$   $[s]$ などへの変化である。この両変化は相関関係にあって、 $[k]$ を二分するためにおこったものである。(中本1976、p163)

この説明は「弛緩」という作用の内実が十分に明らかではない上に、なぜイ・ウ段とア・エ・オ段で $k$ を二分する方向で変化するのかについて言及されておらず不明な点が多い。また、ここで言われる「子音の変質をせまる同一の力」とは、本来母音の果たしていた音韻的区別を子音の変質によって代荷しようとする作用のことだと解されるが、中本自身も述べているように、それはイ段とウ段の子音が変質するか、逆にエ段とオ段の子音が変質するかのどちらかで果たせるものである。つまり、狭母音化にともなってイ・ウ段に「緊張」が生じ、それがイ・ウ段子音を変化させるのであれば、ア・エ・オ段子音にあらためて「弛緩」という作用を考える蓋然性は体系的な観点からは必要ないと思われる。

さらに図1に示された具体的な音声変化についても検討すべき点があると解される。図1には $*k > k^? > tʃ^? > tʃ$ のような音声変化の方向が示されている。これには喉頭化した音声( $*k > k^?$ )が口蓋化する( $k^? > tʃ^?$ )という二つの変化が含まれているが、二種の音声変化がそれぞれどのような要因によって生じるものであるか検討が必要である。

このように、琉球方言のカ行子音についてはその成立要因まで研究がなされているが、なお検討すべき課題は残されている。以下、本稿では中本(1976)を踏まえながら共時態に見られるそれぞれのカ行子音体系の成立について考察していく。

### 3. 本稿の目的と方法

前節で述べたように、琉球方言各地で見られるカ行子音の実態とその分布についてはかなりの点で明らかになっており、その成立についても体系的な観点から説明がなされてきたが、なお検討の余地が残されていると解される。

本稿では、共時態として見られる各地の体系にカ行子音の通時的変遷過程が投影されると仮定し、各体系がどのような連続性の中に位置付き、それぞれにどのような変化過程が認められるかを検討することで、カ行子音体系の変遷を明らかにしていく。具体的には、表1で示した各体系が図1のような音声変化を辿った時に、どのような変遷図として描かれるか個別に検討していき、その中で問題となる体系や問題となる変化について取り上げていく。

但し、今回は紙幅の都合上、奄美・沖縄方言に相当するA類についておこない、先島方言のB類に関しては別稿に譲る。

#### 4. 力行子音体系の通時的変遷

あらためて本稿で取り上げる表1のA類について見てみると、現在の奄美・沖縄方言の力行子音体系はA-1からA-8の8種に下位分類されている。各体系の変遷過程、成立過程を考えるに当たっては、力行子音体系の原形、すなわち本土方言と琉球方言が分岐する以前の力行子音の体系を全段kであったと措定する。すなわち従来の研究でもおこなわれてきたように、共時態として確認されるカキクケコの子音は原形として[k<sub>a</sub>,k<sub>i</sub>,k<sub>u</sub>,k<sub>e</sub>,k<sub>o</sub>]/ka,ki,ku,ke,ko/という体系をもち、そこから変化してきたという立場を踏襲して論を進めていく。

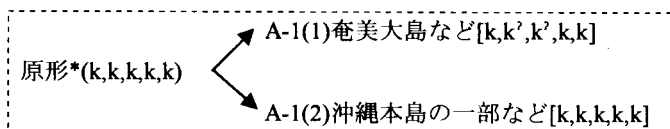
さて、力行子音の原形を[k,k,k,k,k]という体系であるとする、A-1からA-8の各体系へはそれぞれどのような過程を経たのであろうか。先掲の図1を踏まえて、その変遷を組み立て、その中で問題となる体系や音声変化について指摘していく。

##### 4-1. 原形からA-1の体系への変化

A類の8種の体系のうちもっとも原形に近いと考えられるのはA-1の体系k,k<sup>(2)</sup>,k<sup>(2)</sup>,k,kであり、そのA-1には二つの体系が含まれていることがわかる。すなわち喉頭化をもつ[k,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,k,k]という体系と原形からすべての段で変化の見られない[k,k,k,k,k]という体系の二つである。これを中本(1976)に従いA-1 (1)とA-1 (2)に区別する。前者は奄美大島一円の方言であり、後者が沖縄本島の一部の方言である。

原形からA-1 (1)の体系への変化はイ・ウ段に喉頭化が生じる変化であり、図1に示されたタテの変化だけが見られるものである。中本(1976)によれば、この喉頭化音[k<sup>2</sup>]は琉球方言の特徴的な母音変化である狭母音化(e>i, o>u)を承けて、イ・ウ段とエ・オ段がそれぞれ統合することを避けるために子音の側で弁別を図るように生じた変化とされる。

一方、A-1 (2)の体系というのは原形と同じ姿である。見た目の姿は同じでも、この体系もA-1 (1)と同様にイ・ウ段で\*k>k<sup>2</sup>のような喉頭化を起こし、その後k<sup>2</sup>>kのように回帰した可能性を否定できない。この可能性については証しの手立てがないため、特に触れずに論をすすめる。以上を、図示すると次のようになる。なお、本稿では原形とA-1 (2)を区別して以下のように位置づける。



## 4-2. A-1 (1)を起点とする変化

### (i) A-1 (1)からA-4への変化

続いてA-1 (1)から派生する体系はA-4[h,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,k,Φ]であり、沖縄本島北部の名護、本部一円に見られる。ここで生じた変化はア・オ段の摩擦音化(k>h, k>Φ)である。この変化はイ・ウ段に生じた無気喉頭化という調音を強化する変化とは逆で、発音の経済化<sup>注3</sup>とも解される変化である。図1では右むきの変化として示されている。

しかし、A-1 (1)の段階で狭母音化によるイ・ウ段とエ・オ段の音節統合をイ・ウ段が無気喉頭化することによって回避したのであれば、ア・オ段の子音がk>hと変化する必要性は音韻体系上なかったものと解されるが、これについて中本は先に示したとおり次のように述べている。

子音の変質をせまる同一の力が、イ・ウ段では「緊張」、ア・エ・オ段では「弛緩」という両方向の力となって変化をおこしたにすぎない。(中本1976、p163)

中本によれば、ア・エ・オ段におけるk>hという摩擦化もやはり母音変化によって要求された子音変化であるということであろう。しかしながら、母音変化に伴う体系上の区別はイ・ウ段の子音変化\*k>k<sup>2</sup>によってなされているため、ア・エ・オ段を変化させた「弛緩」という要素の内実についてはなお検討する必要がある。

A-1(1)奄美など[k,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,k,k] → A-4 名護・本部など[h,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,k,Φ]

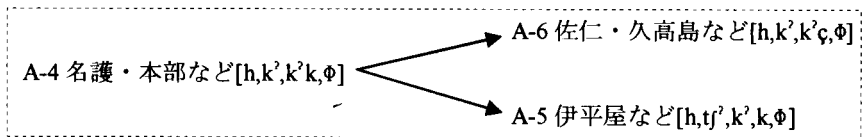
### (ii) A-4からA-5、A-6への変化

A-4の体系からはA-5、A-6へと二方向へ推移すると解される。まずは、A-4からA-6[h,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,ç,Φ]の体系への変化について見ていく。

ここで生じる変化はア・オ段で先に生じたk>hの摩擦化に続き、エ段においても摩擦化が生じるものである。しかし、理論的にはA-6の体系[h,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,ç,Φ]はA-1 (1)[k,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,k,k]の体系から現在の共時態に確認されないA-x[k,k<sup>2</sup>,k<sup>2</sup>,ç,Φ]のような推定形を想定し、そこから変化してきたとも考えられる。但し、この場合エ・オ段の摩擦化がア段に先駆けて生じ、その後、ア段がその変化を追うように摩擦化するということになる。現在の琉球方言の子音体系を俯瞰したとき、ア段子音が他の子音から独立して存在する例はほとんど見あたらず、少なくともア・オ段子音はともに同じ姿であることから、ア段子音の変化はオ段子音が変化するのとはほぼ同時であると考えた方がよいだろう。加えて、エ段子音の変化は母音変化の段階でエ段はオ段よりやや遅れて狭母

音化することが指摘されているため、A-6の体系を考える際にも、ア・オ段の変化を追うようにエ段子音が変化したと捉え、A-4からの変化と位置づけるのが適当だと解される。

次にA-4からA-5への変化について見る。A-5は[h,tʃ,kʰ,k,Φ]という体系で伊平屋島・伊是名島・伊江島・本部半島などに広がっており、図1の変化系図に沿って考えると、A-4の体系から左むきの変化である $k^ʰ > tʃ$ という口蓋化がイ段に生じる体系である。しかし、先に問題提示したように、この音声変化は喉頭化、そして口蓋化という二種の音声変化を含んでおり、それぞれどのような要因で引き起こされた変化なのかという検討が必要である。喉頭化については中本の言うように、エ・オ段が狭母音化するのにもなってイ・ウ段に「緊張」が生じ、その結果イ・ウ段子音の変質をせまるといふ体系上の要請が引き起こした変化として説明できるだろう。では口蓋化についてはどうだろうか。口蓋化というのは、例えば現代日本語でキの子音が後続する母音の*i*に影響され[kʲ]のようになる現象であるが、琉球方言や東北方言のように口蓋化がさらに進んで別の音素になることもある。特に琉球方言の口蓋化は伊波(1930)がイ・エ段の統合を避けるために起きた変化だと言及しており、さらに中本(1976)でも*e*の母音が*i*の母音に統合しようとする力が働いている時期に $k > tʃ$ の変化がおこったと述べていることから、A-1 (1)でイ・ウ段の子音が無気喉頭化の $k^ʰ$ に変化したのと同じ要因で生じる変化として考えられてきたのである。しかし、あらためてA-4の体系を見ると、すでに喉頭化によってイーエ段とウーオ段の区別がなされており、ここに口蓋化が生じる蓋然性は見あたらない。この口蓋化についても、ア・エ・オ段の弛緩の問題と合わせて後に言及する。



### (iii) A-6からA-8への変化

続いてA-6の体系からA-8[h,k,k,f,Φ]の体系への推移が起きたと考えられるが、ここではイ・ウ段に生じた喉頭化音が弱化することで $k^ʰ > k$ の回帰を起こすと同時にエ段のçがfへ変化したと解される。イ・ウ段子音の喉頭化音が消失する要因としては、エ・オ段子音の摩擦化によってイ・ウ段/ $k^ʰ$ —エ・オ段/h/という対立が生じ、イ・ウ段の



喉頭化音が体系的に必要ななくなったということが考えられ、そのために発音の経済化に基づき生じた変化と言えるだろう。エ段においては $\text{ç}$ がより発音の簡便な $\text{f}$ へと変化したと解される。

A-6 佐仁・国頭・久高島など $[\text{h}, \text{k}^2, \text{k}^2, \text{ç}, \Phi]$   $\longrightarrow$  A-8 麦屋 $[\text{h}, \text{k}, \text{k}, \text{f}, \Phi]$

(iv) A-7の体系の位置づけについて

A-7の体系についてはその位置づけに次のような二通りの道筋を想定することができる。

A-6 佐仁・国頭・久高島など $[\text{h}, \text{k}^2, \text{k}^2, \text{ç}, \Phi]$   $\longrightarrow$  A-8 麦屋 $[\text{h}, \text{k}, \text{k}, \text{f}, \Phi]$   
 $\searrow$   
 A-5 伊平屋・伊是名など $[\text{h}, \text{t}^2, \text{k}^2, \text{k}, \Phi]$   $\longleftarrow$  A-7 喜界・和泊など $[\text{h}, \text{t}^2, \text{k}^2, \text{ç}, \Phi]$

A-6から推移したと考える場合、A-4からA-5の過程と同じように $\text{k}^2 > \text{t}^2$ という変化が認められる。一方、A-5の体系からエ段子音が $\text{k} > \text{ç}$ と変化した道も想定することができ、その成立について判断に迷う体系である。いずれにしても、口蓋化の問題とア・エ・オ段における弛緩の問題を含む体系であるため、(i)(ii)で挙げた問題に触れた上でその位置づけをおこなっていく。

### 4-3. A-1 (2)を起点とする変化

(i) A-1 (2)からA-2への変化

では原形から二分されたもう一方の体系であるA-1 (2) $[\text{k}, \text{k}, \text{k}, \text{k}, \text{k}]$ を起点とする変化について見ていく。まずA-1 (2)から変化するのはA-2の体系 $[\text{k}, \text{t}^2, \text{k}, \text{k}, \text{k}]$ であり、これはイ段における $\text{k} > \text{t}^2$ の口蓋化という変化が生じた体系である。この変化は図1に照らすと左むきの変化として示されており、沖縄中南部に広く見られる体系である。

A-1(2)沖縄本島の一部など $[\text{k}, \text{k}, \text{k}, \text{k}, \text{k}]$   $\longrightarrow$  A-2 沖縄中南部など $[\text{k}, \text{t}^2, \text{k}, \text{k}, \text{k}]$

さて、今挙げたカ行イ段音の口蓋化 $\text{k} > \text{t}^2$ という変化も先述の通り、狭母音化によるイーエ段の弁別を保つために引き起こされた変化と考えられており、その成立要因はA-1 (1)などの体系に現れた喉頭化 $[\text{k}^2]$ の場合と同じように説かれてきた。しかし、狭母音化による音節統合の回避をある方言では喉頭化で、ある方言では口蓋化でおこなうとき、この二つの方言がどのような理由から $[\text{k}^2]$ と $[\text{t}^2]$ によって二分されるの

かについても検討する必要があるだろう。この点についても後述する。

## (ii) A-2からA-3への変化

A-2からA-3への変化は先に口蓋化しているイ段音のtʃが破裂性を失って摩擦音fへと変化するものである。これは発音の経済化による変化だと解される。

A-2 沖縄中南部など[k,tʃ,k,k,k] → A-3 金武・宜野座など[k,f,k,k,k]

## 4-4. 問題点の整理

ここまで、図1の音声変化に従って奄美・沖縄方言の力行子音体系の変遷について整理してきた。力行子音体系は原形から沖縄本島北部及びその周辺離島に広がるA-1 (1)の体系と沖縄本島中南部に広がるA-1 (2)という体系に大きく分けられ、それぞれの変化の道を辿っていたことがわかる。その変化過程の中で見られた問題点は次の4点にまとめられる。

- (1) ア・エ・オ段における「弛緩」について
- (2)  $k^2 > tʃ^2$  という変化における喉頭化と口蓋化について
- (3) A-7の体系の位置づけ
- (4) 喉頭化する方言と口蓋化する方言について

次章よりここに挙げたそれぞれの問題点について考察をおこなう。

## 5. 問題点の考察

### 5-1. ア・エ・オ段における「弛緩」について

ア・エ・オ段における「弛緩」とは、中本(1976)に従えば狭母音化にともなうイーエ段とウーオ段の統合を回避するためにア・エ・オ段の子音に変質をせまるという体系的な力である。しかし、一方ではイ・ウ段にも「緊張」という力が加わり、それがイ・ウ段子音で無気喉頭化の[kʰ]を生み出すと説かれている。体系的な観点から考えると、イ・ウ段またはア・エ・オ段のいずれかの子音が変化してしまえば、狭母音化にともなう音節統合は回避されるはずだが、実際にはイ・ウ段には喉頭化が生じ、ア・エ・オ段にh音化が認められるのである。それについて筆者はイ・ウ段における「緊張」とア・エ・オ段の「弛緩」という作用の内実について体系的な観点からだけでは十分な解決がなされないと考える。すなわち、「緊張」と「弛緩」というのは音声の変化を十分に踏まえてこそ成り立つ概念だと考える。

狭母音化というのはe>i、o>uのように、もともと半広母音だったe、oがそれぞれi、uに近づく変化である。その時期に母音がi、uに集中することで、口腔は総体的に狭くなり、その結果声道を通過する呼気圧が強くなると解される。e、oの母音を発音する時よりもi、uを発音する時の方が、声道内にかかる圧力がより高くなるというのは国立国語研究所(1990)でも声道内圧のグラフによって示されている。強くなった呼気が各調音器官に圧力を加えることで、各子音の調音を変化させるようにはたらいのものと解され、この各調音器官に与える圧力こそが音声学的な「緊張」だと考えられる。すなわち、イ・ウ段子音においてはもとのエ・オ段が狭母音化することにもない、強くなった呼気を喉頭の狭窄によって抑制する方向へと変化していったのである。イ・ウ段子音で呼気を抑制する一方で、ア・エ・オ段子音は抑制された呼気の影響によって調音が緩むように変化を始めることで発音の経済化という自然な音声変化も相俟って摩擦化の道を辿ったのであろう。この調音上の緩みがア・エ・オ段における「弛緩」と解されるものである。

すなわち、「弛緩」とはイ・ウ段で呼気の強まりを喉頭の狭窄によって抑制したために生じた音声生理学的な調音上の緩みであり、その結果イ・ウ段→ア・エ・オ段のようにカ行子音を二分するような変化をおこしたと考えられるのである。

## 5-2. $k^? > t_j^?$ という変化における喉頭化と口蓋化について

A-5の体系を考える際に問題とした $k^? > t_j^?$ の口蓋化という現象は図1からもわかる通り $k > t_j$ と平行する音声変化であると捉えられている。そのため、従来はこの音声変化の要因については特に取り上げられてこなかった。

琉球方言における口蓋化についてはA-1 (2)を起点とする各体系に見られるような $k > t_j$ が代表的なものである。先に4.3 (i)でも触れたように、この口蓋化は従来、狭母音化によって音節統合が進む中でイーエ段の弁別を保つために引き起こされた変化と考えられており、体系的な観点から考えると喉頭化の成立と平行するものと解されるが、喉頭化 $[k^?]$ の成立の場合と同様にその音声的側面については特に言及されていない。 $k^? > t_j^?$ の変化を考えるにあたって、まずは $k > t_j$ という口蓋化の音声的側面について検討をおこなう。

口蓋化とはもとの子音の調音点が高口蓋に近づくように移動することを指しており、例えば現代日本語でキの子音が後続する母音のiに影響され $[k^i]$ のようになる現象である。しかし、琉球方言や東北方言のように口蓋化がさらに進んで別の音素にな

ることもある。キの音節について内間・新垣(2000)から那覇方言の例を挙げると次の通りである。

[tʃimu](肝)、[tʃiN](着物)、[tʃi:ba](牙)、[tʃinu:](昨日)、[satʃi](先)、[ʔi:tʃi](息)など。

これらは $k_i > k_i > tʃ_i$ のように口蓋化が進行した結果と解されるものだが、伊波(1930)や中本(1976)に従えば、これらの変化は狭母音化によってイ・エ段が統合しようとする体系的な緊張が口蓋化を促進し、結果として別の音素を成立させたということになる。しかし、体系的な緊張が要因であれば $[k^ʔ]$ の成立同様にウ段にも口蓋化が生じるはずであるがそのような方言は当該地域には確認されない。

筆者はこの $k > tʃ$ という口蓋化の現象も琉球方言の狭母音化に関わる呼気が影響していると考えている。すなわち、狭母音化によって生じる強い呼気は、すでに母音*i*の影響で $k_i > k_i$ のように口蓋化しているイ段子音の前進傾向に拍車をかけ、ついに $k_i > tʃ_i$ と別の音素にまで変化させたものと解され、もともとイーエ段の体系弁別を指向して生じたものではないのではないだろうか。体系上の弁別を指向して音韻変化が進むなら、ウーオ段においても子音の対立が生じるような変化が引き起こされた可能性があるだろう。

このように考えると、従来体系的な緊張を要因として説かれてきた口蓋化と喉頭化はその成立要因に共通点と相違点があることがわかる。口蓋化が今述べたように狭母音化による強い呼気と関わって成立したという点では喉頭化の成立と共通している。しかし、強くなった呼気がすでに $k_i > k_i$ という変化をおこしていたイ段音の前進傾向を促進するようにはたらいだ口蓋化に対し、喉頭化音は強くなった呼気を抑制するようにはたらいだ結果生じた音声という点で違いがある。

このような観点から問題となる $k^ʔ > tʃ^ʔ$ の変化について考えてみるとどうだろうか。A-5の体系の前身であるA-4の体系は $[h, k^ʔ, k^ʔ, k, \Phi]$ のようにすでに喉頭化が発生しており、それによってイーエ段とウーオ段がそれぞれ弁別されている。喉頭化 $[k^ʔ]$ の発生は狭母音化による呼気の強まりを抑制すると考えられるので、その段階で口蓋化を引き起こす音声的要因はなくなるのである。それでもA-5においてイ段音に $k^ʔ > tʃ^ʔ$ が生じるのは、この変化が $k > tʃ$ の口蓋化とは異なり体系的な要請に応えるための変化だからだと考えられる。すなわち、先に発生したイーエ段の $/k^ʔ/ - /k/$ という対立が近似した音声による対立であるために、より顕著な音声的差異を保ちたいという体系的要請である。それを適えるようにしてイ段に $[tʃ^ʔ]$ を生みだすことで、 $[tʃ^ʔ][k]$ という音声的な聞こえも異なる対立をもつ体系へと推移したと考えられるのである。

以上のように、中本が図1で平行的に示した $k^2 > t^2$ という変化と $k > t$ という変化は、口蓋化という点で共通しているようだが、その発生に関わる要因は音声的な要請か体系的な要請かという点で異なる変化であったと言えるだろう。

さて、このように音声的差異によってよりはっきりとした弁別をおこなうという発想はア・エ・オ段のh音化とも深い関係があるだろう。先にア・エ・オ段の「弛緩」という作用についてその内実は音声生理学的な調音の緩みであると述べたが、その調音の緩みがh音化を促進したのも、もともとイ・ウ段/ $k^2$ /→ア・エ・オ段/ $k$ /という類似した音声による音韻的対立をさらに明瞭な弁別へと指向する体系に適ったものだからと考えられるのである。

### 5-3. A-7の体系の位置づけ

以上の考察を踏まえて残されたA-7の体系を位置づけるとどうなるだろうか。A-7の前身であると考えられるA-5、A-6の体系はすでにイ・エ段、ウ・オ段の区別を持っており、さらに前節で述べたような音声的な弁別もはっきりと保っている。そのような中では $k^2 > t^2$ の音声変化は特に要請されず、むしろエ段子音がア、オ段子音に牽引され同じ姿に変化するよう促進される方が体系的には自然だと解されるのである。

すなわち、A-7の体系は次のようにA-5の体系から推移して成立したものと考えられるわけである。

A-5 伊平屋・伊是名など  $[h, t^2, k^2, k, \phi]$        $\longrightarrow$       A-7 喜界・和泊など  $[h, t^2, k^2, \phi]$

### 5-4. 喉頭化する方言と口蓋化する方言について

奄美・沖縄方言のカ行子音体系はA-1 (1)、A-1 (2)の各体系を起点にして大きく二分されていた。その2種を喉頭化、口蓋化という観点から捉え直すとA-1 (1)の系統ではイ・ウ段で喉頭化を引き起こす体系であり、さらにア・エ・オ段の摩擦化が生じることも確認された。一方、A-1 (2)の体系は口蓋化を中心とする変化によって成立しており、狭母音化の結果イーエ段ではイ段の口蓋化によって弁別を保つもののウ・オ段の音節は統合してしまっている。

筆者はこの2種の体系の違いについて次のように考える。A-1 (1)を起点とする体系は狭母音化で生じた呼気の強まりが音声変化を引き起こし、さらにその音声を音韻の弁別にまで転化することを指向する体系であるのに対し、A-1 (2)では狭母音化による強い呼気が音声変化を促進するだけで音韻の弁別は指向しない体系ではな

いだろうか。

先述の通り、A-1 (1)では狭母音化にともなう強い呼気の発生を承けてイ・ウ段が喉頭化して[kʰ]となりエ・オ段の[k]と音韻的区別を保った。その後、喉頭化音の発生によって呼気が弱まったために、ア・エ・オ段で調音上の緩みを生じ摩擦化を引き起こすが、これは同時にそれまで類似した音声対立であった[kʰ]-[k]からより弁別的な[kʰ]-[h]という体系上の要請にも適うものであった。

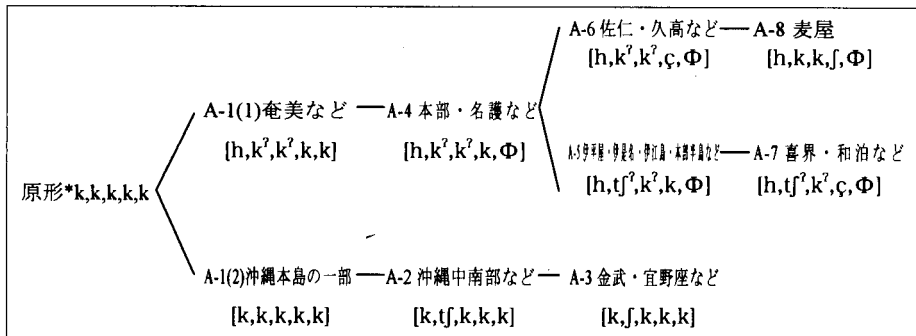
一方、A-1 (2)は狭母音化による呼気の強まりが、一般的に生じる\*ki>ki>tʃiのように別の音素を成立させたと解される。

このように、喉頭化をもつ方言はより音韻的な区別を明瞭にするような変化の道を辿り、口蓋化をもつ方言は体系的な差異を指向せず音声変化の進むままに体系を推移させてきたのである。

## 6. 奄美・沖縄方言における力行子音の変遷

ここまでの考察を踏まえて、奄美・沖縄方言における力行子音体系の変遷についてまとめると次の図2のようになる。

図2. 共時態から構築される力行子音体系変遷図



本稿で述べてきたとおり、奄美・沖縄方言の力行子音体系を二分するA-1 (1)とA-1 (2)の体系は、狭母音化による呼気の強まりを承けてどのような変化を指向したかという点で違いがある。A-1 (1)では狭母音化によって発生する強い呼気を喉頭で抑制するように変化を進め、そこでイ・ウ段に生じた喉頭化音[kʰ]をさらにエ・オ段との

体系的な弁別にも用いるようになった。

一方、A-1 (2)では狭母音化で生じる強い呼気はすでに生じている口蓋化という現象をさらに促進するようにはたらいと解され、これは音声生理学的な変化として捉えられるものであった。

すなわち、狭母音化という母音構造の変化を承けて、A-1 (1)は体系上の弁別を指向するように子音が変化し、A-1 (2)では音声変化の進むままに変化していくことで現在の共時態のような変遷を描くものと解されるのである。

従来はこのように共時態の体系を一つの変化軸上に位置づけながら変化を捉えることは少なく本稿の新たな試みとして提示するものである。このような方法によって、現在の共時態には確認されない体系を推定しながら、共時態を検討することができると考えている。今後は各子音についても琉球方言に広がる多様なバリエーションから変遷図を構築し、全琉球的な音韻変化について探っていく必要がある。

## 注

<sup>1</sup>引用中の[k']は本稿の[k']と同義である。

<sup>2</sup>引用中の[F]は本稿の[Φ]と同義である。

<sup>3</sup>ア段のk>hに対し、オ段のk>Φは母音uの円唇性も考慮する必要があり単純な経路化とは言えないが、本稿ではこの変化が\*ko>ku>hu>Φuという音声変化を辿ったと捉え、その中のku>huの段階を重視してア段と平行的に考える。

## 参考文献

- 伊波普猷 (1930) 「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」『国語と国文学』7-8 (伊波普猷(1974)『伊波普猷全集』第4巻平凡社所収, pp. 17-46).
- 内間直仁・新垣公弥子 (2000) 『沖縄本島北部・南部方言の記述的研究』風間書房.
- 内間直仁 (2004) 「古代日本語のワ行子音の[b]音化について—宮古・八重山方言を中心に—」『国語学』55-2 日本語学会, pp. 32-44.
- 国立国語研究所編 (1990) 『国立国語研究所報告100 日本語の母音・子音・音節』秀英出版.
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局.
- 金城朝永・服部四郎 (1955) 「附、琉球語」市河三喜・服部四郎(編)『世界言語概説下巻』研究社, pp. 307-356.